



# 経営の散歩道

川中経営研究所  
所長 川中清司

▼水中で息をとめたまま四分三十秒、肺活量は四四〇〇cc——シンクロナイズド・スイミングで銅メダルに輝いた、日本の水中花、小谷実可子。しかし三年前には、胸に水がたまり闘病生活を送っていた。

柔道・金メダルの斉藤仁選手も、去年三月に右ひざの靭帯を傷めるなど、一時は柔道を捨てるまでに追いこまれていた。

そのほかにも、だめかと思われた悪条件と闘い、それを克服した五輪選手がいた。

オリンピックで技を競い闘うということは、それ以前に自分との厳しい闘いに克つことが絶対関門なのだ。華やかな月桂冠の陰に、地道な努力を積み重ねる日々が、どんなに大切な道程かを教えてくれた。

▼「人に勝つより自分に勝て」姿三四郎の歌ではないが、スポーツの勝負はつまるところ克己心に行きつく。

対決の場で、不安と焦りを越えるゆとりが勝負を決める。

一回・一回、条件が違う。絶対大丈夫と思えば、おごとりと油断を生じる。用心にすぎれば、委縮し活達を欠いてしまう。瞬間に対応して発揮する全能力の



集結の妙は、余程の日常訓練を積み重ねれば達し得ない。

▼金メダルの数を変えたのは、選手の動きを映像やコンピュータで分析し、ムダを省いて運動効率を高めるために活躍した「人間工学」の力であった。努力の科学性が時間を縮めた。

さらに選手育成の仕方や、生活保障のしくみについての各国の差も見逃せない。

経済で世界をリードする日本

も、オリンピックでは振るわなかった。決して金メダルの数に不服ではないが、スポーツや教育についての知恵不足に思えてならない。

▼脳の働きも訓練次第だ。

ソロバンの練習を続けると、億単位の暗算も可能になる。訓練の量が頭脳の質を変えるのだ。駐日アメリカ人の子供は算数の成績が良い。これに着目して米国でもソロバンを教育にとり入れ始めた。

指先を使うことは、右脳が開

## 第五回 そろばんの効用

発され、創造力を伸ばすのに役立つ。脳の老化防止にも良い。

中国では、手のひらの中で、ゆっくりと胡桃(クルミ)をころがして、老人ぼけを防いでいる。

▼人間の脳は、一・三割ほどの重さで右脳と左脳からなる。

一九八一年にノーベル賞をうけたロジャー・スベリー(カリフォルニア工科大教授)は、左脳は言葉を喋ったり、書いたりする能力、右脳は、一目みて相手が誰かを識別する等、映像・

空間的で、ひらめきや創造能力に優れており、両脳ともお互いの機能を補い高めあう力があることをつきとめた。

▼人間の細胞は、赤ん坊で二兆、大人で二十兆に増えるが、脳細胞だけは、生まれた時のまま百四十億程度にとどまっている。

成長とともに脳細胞から出ている突起の絡みも複雑になるが、これも二十才頃で止まり、ハードウエアができ上がってしまう。頭の良し悪しは、脳の重さやシワの数とは関係がない。

頭を鍛えるとは、脳の使い方を訓練することで、合理的にくり返せば必ず良くなるもの。いわば自分流のソフトウエアが開発されていくわけだ。

▼頭も体も訓練は自分自身がするしかない。しかし、その訓練を助けるのが教育なのである。

エジュケーション(教育)の語源は、ラテン語のEDUCA REで「引き出す」の意味だ。

教育は決して詰めこむものではない。考えさせ、引き出させ伸ばしていく、自発への愛の継続ではないのか。

(六十三・十一)